

- 古賀委員長 次に、田中康夫君。
- 田中（康）委員 与党統一会派、国民新党・新党日本の田中康夫でございます。
- 開闢以来の事態に我が日出る国は直面しているわけでございまして、今までの慣例ではこちらは野党席だそうでございますが、まさに与野党を超えて私たちの日本を再興するという観点で、こちらの席から質問させていただきます。
- 実は、きのう岩手県の大槌町というところで、遊覧船の「はまゆり」、これは釜石の遊覧船であつたわけですが、大槌町で整備をしていた船が津波で何回転もして二階建ての建物の上に乗りました。そして、きのうこれを撤去するという作業が行われたわけでございます。
- これに関して、大島章宏大臣、どのようにお感じになられたか、見解をお願い申し上げます。
- 大島國務大臣 田中議員からの御質問でござい

## 新党日本代表 田中康夫 質疑

2011/05/11(水) 9:21~9:38

### 第177回国会（通常国会）

#### 衆議院 國土交通委員会

震災対応及び今後の復旧・復興の在り方について



さあ、信じられる日本へ。  
新党 日本  
nippon-dream.com

ますが、私も、過去の歴史といいますか、そのときそのときに生じた事実というのは、きちっと後世に残すことは大変大事なものだらうと考えております。

それをどういう形で残していくかということであります。今回の大震災においても、内陸部にここまで津波が来ましたという、自然石に刻んだものが、百数十年前のものだというんですが、そういうのが残されていた。それを見ながら、ここまで津波が来たのか、こういうことを後世の人々に知らせようという、その一つのあらわれだと思います。

今回の大地震においてこれだけ甚大な、想像を超える被害があつたということをどのような形で残すかなんですが、いずれにしても、そういう事実関係はしっかりと残しておくことが必要だと私も受けとめております。

○田中（康）委員 大変心強いお話をありがとうございます。産経新聞がこの遊覧船の機関長だった方の発言を載せております。その撤去を見守りながら、震災の象徴として残してほしい気持ちもなくはない、こういうふうにおっしゃっているわけですね。

これはかつても、大槌町の方々もやはり多くの方が亡くなつた、私ども、貞觀地震という平安前期の地震、四月二十九日の予算委員会でも述べましたが、その地震があつた。しかし、そのことが記憶とともに薄らいでいく。あの広島の原爆ドームというものは、もちろん、原爆の悲惨さだけでなく、歴史をきちんと刻む、そしてその場所に多くの世界の方々がお越しになる。私は、例えば

気仙沼も、水産市場、漁港として再生すると同時に、これは地元選出の自由民主党の小野寺五典議員にも御賛同いただいておりますが、あの一角をきちんと国が買い上げて残す、そして、そこに津波研究所であつたり震災博物館をつくるということ、これは生きた歴史教育の世界遺産として、世界からその場所に訪れる、そのことが結果として、皆さんに深く刻んでいただき、観光資源にもなるのではないか。

このことは、地域の方が思われていてもなかなかとも国土交通大臣がそのような場所を何ヵ所か設ける、私はこれはとても大事なことではないかと思っております。ミラノにも、ビアカルドウツチという通りのところに魔女博物館というのがござります。これはまさに魔女狩りがあつたことで、いわゆる好奇の目でつくられたのではなく、やはりそのような歴史をきちんと我々が刻み込んでいくということでございます。ぜひお願いを申し上げたいと思います。

そして、続いてでございますが、先日、連休前に、御存じのように、東日本大震災による被害を受けた公共土木施設の災害復旧事業等に係る工事の国等による代行に関する法律案と東日本大震災により甚大な被害を受けた市街地における建築制限の特例に関する法律案、これが通りました。ですから、最大六ヶ月延びました。

しかし、私が思うのに、都市の計画というものは、やはりよい意味で責任のある者がビジョンを

示す。後藤新平だけではございません。パリの町も、皆様御存じのように、ルイ・ナポレオン三世というときに、ジョルジュ・オスマンという県知事であり都市計画家が、三十メートルの高さの建物にするというパリ大改造を行いました。そして、おおむね八階建てでございます。ファサードがついていて、そして並木のブールバードをつくる。ルーブル美術館もそのときにできました。これは都市における、パリの町には食べ物や洋服があるからだけ訪れるのではない、その町自体が魅力があるからであろうと思います。

私は、津波に遭ったような場所も、もちろん、都市の方々はその地域に根差して何かしようと思いません。しかし、そのときに国が、頭越しなのではなくて、今申し上げたような、マスター・アーキテクトと呼ばれます、そうした一人の都市計画家であつたり建築家であつたりがきちんととしたビジョンを示して、その上で地域の実情をわかつている方々と一緒につづいていく。そうでありませんと、自治体がつくるもの、よいものもあるかもしれません、しかし未成熟なものもあるかもしれませんときには、国の側はお金を出すだけで、何かそれに協力するという形では、手続は踏んでも成果が出ないのでなかろうかと私は思っております。

こうしたマスター・アーキテクトという概念についても、大畠さんの御見解をお聞かせください。

○大畠国務大臣 御質問の、マスター・アーキテクトを起用して、今回の大震災の地域の町の再建に活用すべきじゃないかという御指摘でございます。先ほども御答弁申し上げましたが、今回の大震

災の事実というのは何らかの形で残さなければと思います。実は私も、田中先生のお話を伺つていまして、思い起したことがございます。ボーランドの町に行つたときに、名前はちよつと失念しているが、ある大きな町の街角の建物の一角に、コーナーに、ここで二十数名の市民が戦争中に殺された、こういうことが刻まれた石が基石に置いてありました。日本の場合には戦争の傷跡というのがほとんど失われ始めておりますが、過去においてこういう事実があつたということをきちっと残しておくことは大変大事だと思います。

そこで、先生が御指摘のように、しかしながら、国が押しつけるのではなく、自治体がどのような形でこの事実関係を残すか、こういう意思を持つてもらうことも大変大事だと思いますので、自治

体の意向というものを十分お伺いしながら、同時に、どんな形で残せるのかについては専門家の方の知恵というのもおかりすることが必要でありますから、そういう意味では、自治体の方でそのような御希望がある、こういうときには国としても、先生の御指摘のような専門家のあつせんというのも行って、きっちりと今回の大震災の事実関係が後世に伝えられるように努めてまいりたいと考えているところであります。

○田中（康）委員 民主党は地域主権ということをおっしゃっております。しかし、これは批判なのではなく、すべてが地域主権になつてしまいますと、国が行うことは、国という概念が残つてしまふ場合に、パスポートの発行と管理以外は全部地域がやるのかという話になります。

やはりこれは、私たちは日本という国家を、まさに国民に根差した国家をどうするかということを、先ほど申し上げましたことも、あるいは今のことも、自治体の側でそういう御要望があればと、コナーに、ここで二十数名の市民が戦争中に殺された、こういうことが刻まれた石が基石に置いてありました。日本の場合には戦争の傷跡というものがほとんど失われ始めておりますが、過去においてこういう事実があつたということをきちっと残しておくことは大変大事だと思います。

このようなマスター・アーキテクト、あるいは、その地域を保全して、そこに研究所も誘致するというようなことの、手挙げ方式というのは今までからあるわけでございます。これは押しつけではなく、國はこういうことをやつたらいいと一人の国民としても、大臣としても思つていい、だからこのように慎み深さではなく、私たちが頭ごなしに、そこまでこの事実関係を残すか、こういう意思を持つてももらうことの大変大事だと思っております。この地域を保全して、そこに研究所も誘致するといい、手挙げ方式で、それに対して、ひもつきの補助金ではなく、一緒にやろうということを宣言される。

私も長野県というところの知事だったときに、軽井沢にいわゆるマンションがたくさんできてくれる。大変語弊があるかもしれませんのが、越後湯沢や熱海のようになりたくないとおっしゃつたときに、法律を変えるということ、条例を変えるということになりますと、それまでの間に建築確認がたくさん出てくると、それは受け入れざるを得ない。

そこで、町長と相談をいたしまして、軽井沢メソッド宣言という、軽井沢の良質な別荘環境は日本本の貴重な財産だ、一部の人のものではない、そこまでいわゆる第一種低層住居地域だけでなく、第一種住宅地域でもマンションは二階建て以下に建設する、二十戸以上のマンションを建設する場合には、二十戸以下に抑える、そして敷地面積を一戸当たり百十平米以上にする、このようなことをい

たしました。

これは法的な権限はございません。しかし、このことを宣言を出すことによって、単なるモグラたたきでなく、多くの方が理解をされると、企業の側も企業市民としてこれに従つてくださつた。

そして、法制度を維持してまいりました。ですから、今の私が申し上げた二点も、ぜひ国土交通行政のかなめとしてお願い申し上げたいと思ひます。

続いて、今回、河川局に大変御尽力をいただいて調査費がついた内容がございます。というのは、堤防の中に鋼矢板という鉄の矢板を入れる。二枚お手元に資料がござります。このような形にするというのが、欧米を初めとする、あるいは韓国を始め、多くの国で行われております。

今までの日本では、堤防の中が砂利と土砂だけでしたので、液状化しやすいという形がございました。今回、名取川の状況を見ても、やはり私たちは、科学を信じて技術を疑わぬ社会ではなく、その意味で、このような鋼矢板を入れるということの調査費がつけられ、現在、その調査をどのように行うかということを事務部局で検討中と伺つております。この点に関して、再び大畠大臣から御決意をお願いいたします。

○大畠国務大臣 ただいまの鋼板の矢板を用いた堤防の強化工法に関する件であります。ま御指摘いただきましたように、今年度より河川局によりまして、最新技術の把握、それから性能の検証等にしつかり取り組むことといたしました。いずれにしても、御提案の、新しい考え方であ

りまして、この工法を用いた場合に、維持管理あるいはコスト、そしてこれから時を経ることについてどういう形の変化が起ころのか、しっかりと検証をして、その検証の結果、大変すぐれたものであるということができれば当然ながら適用してまいりたいと思いますが、御提言をいただきながら、しっかりと検証をして進めてまいりたいと思います。

○田中（康）委員 既に欧米でも行つてのことです。そして、例えばダムをつくる。五十年かかるべきでできない場所があるときに、これは、ある意味ではICUの集中治療室に入れようというような川でございます。しかし、そのICUの集中治療室の中で手術が始まらないとすれば、どんなに医療崩壊の病院でも、その間にマッサージや点滴をいたします。私は、それが護岸の補強であつたり遊水地であつたり、河床掘削、森林整備であろうかと思います。

これは、検討というお言葉をお使いにならなかつたので私は大変心強く思つておりますが、欧米や諸外国で既に行つていていることです。そして、鋼矢板を入れることは、製鉄メーカーだけではなくて、地域密着の土木建設業の方々にも今すぐ携わつていただけることでござります。破堤を全く防ぐ。基本高水流量というようなものを超えるような場合も集中豪雨で出てきております。ぜひ、鋭意進めの形でお願い申し上げたいと思います。

○田中（康）委員 これは、ここに資料で記しましたように、間伐から設置まですべて地域の方々に携わつていただけますので、鉄の鋼製ガードレールと同じ強度でありながら、鋼製ガードレールは四社がつくつておりますが、御存じのようなこうした形は基本的に地元の費用でございますので、今回、国土交通省の英断についております。地域雇用が一キロ当たり五倍になる。

今のお話のように観光地だけではなく、私は、日本は森林県で、またこのような地震の被害があり、そして放射能で世界への加害国になつてしまつた国が、都市においても、例えば皇居の周り、表参道あるいは代々木公園の周り、まさにアーチ

りました。菊川局長に、どのような形で進められる御予定か、お話し下さい。

○菊川政府参考人 お答え申し上げます。

木製防護さくなどの整備で道路事業におきます木材利用につきましては、良好な景観形成や木材資源の有効利用という観点から大変重要な取り組みであります。引き続き推進する必要があると認識しております。

このため、平成二十三年度から、地方公共団体と一緒に、自然公園など景観形成上配慮すべき地域におきまして、今お話をありました、木の香る道づくり事業モデル地区というものを設定いたしまして、木製防護さくなど、道路事業におきます木材利用を推進することいたしておられます。今年度、初年度でございますけれども、国立公園や観光地などで、全国十九地区での取り組みを予定いたしております。

パンオアシスとして木のぬくもりのあるガードレールを設置していく、海外の方もこれをごらんにただいて、日本発の商品になっていくと思います。あるいは、公害というものを克服した、例えば川崎市であつたり尼崎市であつたり、こうした都市部においても、直轄国道あるいは地域の道路も、ぜひ鋭意一緒に設置をしていくという形を一步進めていただければと思いますが、改めて御見解をお願い申し上げます。

○菊川政府参考人 お答え申し上げます。

今御指摘がありましたように、町の骨格を形成する道路あるいは地域にとつてシンボルとなるような道路につきましても、景観的な配慮が大変重要であります。

委員の御指摘、まことに貴重な御提案でございまして、大都市部の道路も含めた取り組みにつきまして、地域の意向なども踏まえながら、地方公共団体と連携しながら検討してまいりたいと思います。

○田中（康）委員 ありがとうございます。とりわけ直轄に関しては国が維持もさせていただいているところですから、お願いを申し上げたいと思います。

富国強兵と言いましたが、強兵は、私ども、敗戦で終えんいたしました。しかし、今回、富国と呼ばれるものも、今までの科学を信じて技術を疑わずの二十世紀型の富国というものを大転換するでも、これは日本が、オンライン、ファーストワンの物づくり産業の日本が、よい意味で実体のある経世済民という、科学を用いて技術を超える

という社会をつくつていける、これが鋼矢板であり今木製防護さくであり、あるいは先ほどの震災の歴史をとどめる、あるいはマスター・アーキテクトということではないかと思います。

週刊SPAというところで「復興のための田中康夫ビジョン」という形でも書かせていただいております。国土交通行政が本当に國のかなめでござります。ぜひ現場の職員の英知を、熱意を皆様と一緒に結集して、地域の方に喜んでいただける新しい社会的共通資本を再興していくということを尽力させていただきたいと思い、質問を終わります。

ありがとうございます。